自分達から逃げだした麻弥は、意外な人物と一緒にいた。

「躯！？」

（何故彼女が、麻弥と――――――！？）

一瞬、動きが鈍ったが、自分を見る麻弥の姿を確認すると言った。

「麻弥、来るんだ。帰るぞ！」

床に座り込んでいる麻弥に手を伸ばす。
「い、嫌！」

それに彼女は、予想通りの拒絶の返事をする。
そう言われることはわかっていたので、手荒ではあったが強引な行動をとった。

「聞きわけのない子だ。」

叱りつけながら言って、実力行使に出た。

「いや、いやよ！」

俺の行動に、彼女は目を閉じて固まる。
可哀想だとは思ったが、これまでのことを覚えておくことの方が、彼女にとって可哀想なのだ。
これでいい、ようやく麻弥を捕まえることができると俺は思った。
だから、予想していなかった。
『彼女』が、俺の邪魔をすることを――――――

「痛っ！？」

「なに勝手なことしてんだ・・・？妖狐・蔵馬？」

手を払いのけられたと気付いたのは、『相手』の声を聞いてから。

そして、麻弥を守るようにその人物は俺の前に立ちふさがった。

（躯！？）

魔界の３大王の一角だった妖怪。
その強さは、現在でも悪名高く、美しさと気高さを備えた女戦士。
付け加えるなら、飛影の年上の彼女でもある。

（何故躯が、俺の邪魔を・・・・？）
疑問には思ったが、それどころではなかった。
今は、麻弥を掴まえるのが先決だった。

「なんの真似だ！？」
「ほぅ・・・俺に向かって、たいした口の聞き方だな。」

俺の脅しに怯むことなく、麻弥を抱き起こしながら躯は言った。

「俺のお気に入りに、勝手なことをしないでもらいたいな・・・妖狐・蔵馬よ？」
「なんだと！？」

（お気に入り！？麻弥が躯のお気に入りだというのか！？）

普通に考えてありえない。
麻弥の様子からしても、彼女が躯を見たのは今が初めてのはず。
混乱する俺に、躯は口元に笑みを作りながら言った。

「・・・麻弥は、俺の身の回りの世話する女の子だ。知らなかったのか？」

躯の言葉に衝撃が走る。
自分の頭がさらに混乱した。